

文学部

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】（参考）

文学部は、2021年度までの各評価基準に関する取り組みを2022年度もおおむね継続し、全体的な質的保証を損ねることなく、さらなる改善等も行っている点は、評価できる。

同学部は全体の理念や方針に基づきながら6学科が自律性を保ち、堅固な教育体制を敷き、積極的な学部運営を行ってきたが、2021年度から専門科目と教養科目の両方を見据えたカリキュラム体系の構築を目指し、学部を挙げてカリキュラム改革の準備を進めてきた。今後スケジュールにそった改革が着実に実施されることを期待したい。

教育課程は順次的・体系的に編成され、資質の高い教員体制のもとでバランスの取れた教育内容が提供されている。これから重要性が増す国際性の涵養や留学生の修学支援について、学科によっては斬新な試みが導入されているので、そうした動きが学部全体で組織的に展開されることが望ましい。また2021年度入試から新たな制度を導入した留学生入試（小論文・面接型）については、従来型の留学生入試（面接型）の受験者数の変動に対して、次年度以降に向けた改善の取り組みができたことは有意義であったと評価できる。

COVID-19の影響下での教育方法や学習成果については依然課題はあるものの、引き続き感染対策を徹底しながら、良質な学習教育活動を継続するための取組みを求めたい。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

文学部では、大学評価委員会の評価結果をふまえ、各学科における改革の取り組みを続けている。目下、学部全体としてカリキュラム改革に取り組んでおり、大学のシステム更新と歩調を合わせるべく、2023年度中の学則改正を目指して学内の調整を続けている。COVID-19の影響下における授業の対応状況、問題点、今後の取り組みについては質保証委員会で意見交換を行い、2022年度第11回教授会で報告している。

2023年度は、COVID-19禍の経験をふまえた上で、新たに導入ないし変更した授業の実施状況についての検証をさらに進め、双方向性の確保や課題のフィードバック方法についての議論を深めるとともに、外国人留学生入試についてもさらなる改善を進めていきたい。また、COVID-19の影響下で制限されていた国際性を涵養するプログラムもすでに一部再開されており、今後は状況の推移を観察しながら多くのプログラムの実施に向けた検討を進めたい。成績不振学生への対応についても検討を深め、学生の心理的負担を軽減し、かつ効果を高めるための方策を考えていきたい。

II 自己点検・評価

1 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

1.1①授与する学位ごとに、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）を記入してください。

文学部は、各学科のカリキュラムのもと、以下に示すような人材を育成する。

1. 古今東西の文献・資料・情報を研究・調査することにより、広い視野・深い教養にもとづく独創的な思考力を発揮できる人間。
2. 歴史・世界・社会の中で客観的に自らの位置を見定め、柔軟な感受性をもって他者を理解し、多様な価値観を公正に評価できる人間。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

3. 当面する課題を検証し、解決策を考え、それを説得力をもって発信できる人間。

< 哲学科 >

哲学科は、所定の単位の修得により以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 哲学的専門性を備えた知識をもつとともに、深い教養と国際的な広い視野をもっている。
2. 古今の哲学者のテクストを正しく理解でき、同時に哲学的知見を現代の諸問題に応用する力を有している。
3. 論理的な理解力や表現力をもち、説得力のある仕方で口頭での発表や文章による表現ができる。
4. ディスカッション等において哲学的教養に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を示せる。
5. 哲学的な問題発見能力と独創的な発想力・問題解決能力をもっている。

< 日本文学科 >

日本文学科は、所定の教育課程のもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての基本的な知識を身につけている。
2. 所属する文学・言語・文芸の三コースいずれかの領域における正確な読解力を有している。
3. 自ら問題を発見し、その問題について考察を深められる思考力を有している（文学・言語コース）。
自ら主題を発見し、その主題について構想を深められる想像力を有している（文芸コース）。
4. 自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力を有している。

< 英文学科 >

英文学科では、文学部全体のディプロマ・ポリシーのもと、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 「ことば」についての幅広い知識と国際的な視野を身につけ、論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力を備えている。
2. 批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力を有している。
3. 自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力を有している。
4. 英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の基礎的な知識をもとに、一つの課題の解決のために、様々な知識を有機的に結びつける能力を有している。

< 史学科 >

史学科は、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対し、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望することができる。
2. 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自立的に問題を発見・追究・検証することができる。

3. 発表・討論において、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解することができる。
4. 次世代の教育に歴史学の成果を生かし、また、文化遺産の継承に貢献することができる。

<地理学科>

地理学科は、地理学科のカリキュラムのもと所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 人間の生活の舞台である地球表層の自然環境や人文・社会環境について基礎的な知識を身につけ、地理的諸事象の基本的メカニズムを理解しているとともに、幅広い教養も身につけている。
2. 地理学的な思考力やものの見方を身につけ、それらに基づく研究方法を用いて考察することができる。
3. 地理学の知をもって社会の諸問題に関心を持ち、他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に発信することができる能力、地域社会のニーズに応えられる能力、および諸問題を解決する能力を身につけている。

<心理学科>

心理学科では、心理学科のカリキュラムのもと、所定の単位を習得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 人の認知について科学的理解をすることができる。
2. 人の発達について科学的理解をすることができる。
3. 観察・実験・調査を通して、心の機能を測定し、分析することができる。
4. 国内外の先行研究や社会的要請をふまえて、自ら課題を設定することができる。
5. 研究・学習成果を的確に他者に伝えることができる。
6. 研究・学習目標を達成するために、他者と協働することができる。

1.1②上記のディプロマ・ポリシーには、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果が示されていますか。

はい

1.1③上記のディプロマ・ポリシーを公表していますか。

はい

【根拠資料】

法政大学文学部HP「ディプロマ・ポリシー」

(<https://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/diploma/>)

1.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

1.2①授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）を記入してください。

<哲学科>

哲学科は、学科の人材育成の目的を達成するために以下に示す教育課程を編成する。

1. 文章読解、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート作成の基礎力を涵養するために、初年次に基礎ゼミを設置している。
2. 国際的な幅広い知識を獲得し、広い視野でものごとを思考できる能力の養成をはかるために、リベラルアーツ科目を卒業所要単位に含めている。
3. 専門科目については、哲学科卒業に相応しい学力を段階的に身につけられるようにするために、概論科目・哲学史科目および基礎演習からはじめて、特講

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

科目、演習（ゼミ）を経て卒業論文に至るという発展的な教育課程を編成している。

4. 視野の広い問題意識を養うために、文学部の「共通科目」、および他学科公開科目の履修を可能にしている。
5. 学生がみずから問題を発見し、解決してゆく力を養うために、卒業論文を四年間の学びの集大成として位置づけている。

<日本文学科>

日本文学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次においては、大学生の学びに必要とされる能力の習得のため、少人数制による初年次教育科目を設置するとともに、専門教育への導入として、日本の文学・言語・芸能、また中国文学について基本的な知識を修得できる科目を配置している。
2. 専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・文芸の3コースを設置し、学生は2年次からそのいずれかに籍を置き、少人数制のゼミナールに所属する。より正確な読解力、深い思考力・想像力、的確な表現力、問題発見・解決能力を涵養するため、専門分野に関する科目および隣接領域に関する科目を、段階的に、また体系的に履修できるよう配置している。
3. 教養教育科目（市ヶ谷リベラルアーツセンター科目）の単位を卒業所要単位に含むこととする。センターのカリキュラムに従って履修することにより、さらに幅広い学問分野の知識を得て、柔軟かつ多角的な認識力・思考力・問題解決力等を涵養する。
4. 4年次においては、ゼミナール担当教員の指導のもと、卒業論文の執筆に取り組む。なお、卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成とし、大学での研鑽の成果を発揮するものとして位置づける。

<英文学科>

英文学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次においては、「演習科目」として、基礎ゼミにおいて導入教育を行ない、同時に、概説科目を配置してさまざまな分野への導入となる「講義科目」を設置している。
2. 2年次においては、学生各自の基礎的な英語力を向上させるための Speaking や Writing などの実践的な科目とともに、学問への興味をかき立てるように、少人数教育としての2年次演習および専門科目を配置している。
3. 3年次においては、専門的な知識が深められるように、併設されている専門科目と合わせて少人数制のゼミを配置している。
4. 4年次においては、学生各自が選んだ研究テーマを卒業論文としてまとめられるように、担当教員のきめ細かな面談指導と添削指導を行なっている。
5. 上記の1～4と並行して、4年間の学生生活を通して幅広い英語力の獲得や文化交流ができるように、海外の提携大学への短期・中期の留学制度を設定している。

<史学科>

史学科では、所定のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 1年次には教養教育に加え、国際的な視野と幅広い知識を身につけるため、日本史・東洋史・西洋史の概説を設置している。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

2. 新入生が大学における多様な授業に十分に適応し、その能力を発揮することが可能になるよう、初年次教育科目として「基礎ゼミ」を設置している。
3. 2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の三専攻に分かれ、演習（ゼミ）を中心とした歴史学の専門的教育に入る。
4. 自立的に研究できる能力を向上させるため、演習とともに史料の活用や外書の読解能力を実践的に訓練する授業を設置している。
5. 自分の専攻にとどまらず幅広い学識を得るために履修できる多様な講義科目を設置している。
6. 4年生は所属ゼミ担当教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成していく。課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を学科における学業の集大成として位置づけている。

<地理学科>

地理学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷キャンパスのリベラルアーツ科目の単位を卒業所要単位に含めている。また、1年次には「基礎ゼミ」で、大学での学習方法の基礎・基本を身につけさせる。
2. 地理学科の専門科目は、1年次では入門的な科目、2年次以降は地理学の様々な分野の基礎的知識を身につけるため各論科目が配置されている。また、主に3年次以降において、地理学の方法論や研究法を身につける、演習や実習科目が配置されている。
3. フィールドワークを通じて地域の実態を調査し、その結果をもとにレポートを作成することによって、調査技能、研究方法および文章表現能力を身につけさせる「現地研究」が必修科目の一つとして配置されている。
4. プレゼンテーションや討論を通して、地理学の研究手法や体系を学び、問題解決能力や卒業論文作成の基礎的能力を身につけるため、演習（ゼミ）が配置されている。
5. 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。優秀な学生が早期に研究活動に専念できるように、3年次で早期卒業し大学院修士課程へ進学する5年一環プログラムも用意されている。

<心理学科>

心理学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

1. 人の心を研究するために必要な知識・技能を偏りなく修得できるように「認知」と「発達」の二領域を中心とした専門科目を配置している。
2. 心理学の全領域に関わる基本的な知識・技能を学生が修得することを促すために、選択必修の学科基礎科目という科目区分を設定している。
3. 1年次に基礎ゼミ、2年次には演習Ⅰ・Ⅱ、3年次と4年次には研究法Ⅰ・Ⅱを配置し、一貫して少人数での演習形式の科目を履修できるようにし、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を系統的かつ継時的に修得できるようにしている。
4. それまでに修得した知識・技能を活用して、人間の心について自らが検討する価値のある問題を設定した上で、科学的・客観的に分析し、その研究成果を明瞭に記述する能力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。

1.2②上記のカリキュラム・ポリシーには、学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成（教育課程の体系、教育内容）・実施（教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等）方針が示されていますか。	はい
1.2③上記のカリキュラム・ポリシーを公表していますか。	はい
【根拠資料】	
法政大学文学部 HP「カリキュラム・ポリシー」 (https://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/curriculum/)	

1.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

1.3①「法政大学学則」第23条（単位）に基づいた単位設定を行っていますか。	はい
--	----

1.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

1.4①「法政大学学則」第22条の2（履修科目の登録の上限）に基づき、1年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行っていますか。	はい
1.4②学生の履修指導を適切に行っていますか。	はい
1.4③学生の学習指導を適切に行っていますか。	はい
1.4④学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行っていますか。	はい
1.4⑤それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。	はい
1.4⑥シラバスの内容の適切性と授業内容とシラバスの整合性を確保していますか。	はい

【根拠資料】	
1.4① ・『文学部履修の手引き』 ・「成績優秀者の他学部科目履修制度 履修の手引き【文学部生用】」	
1.4② ・2022年度 第10回 教学改革委員会 議事録 【哲学科】 新生ガイダンス配付資料 (https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023bun_freshman_guidance.pdf) 在学生ガイダンス配付資料 (https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023_bun_zaigakusei_guidance.pdf) 【日本文学科】 『卒業論文執筆のてびき 第7版』、留学生サポート小委員会履修相談資料 日本文学科サイト・専門科目の履修モデル (http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1153) 日本文学科サイト・日本文学科3年次履修チェックリスト (http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2016/04/0602e18f0b2205f5eccc19dcead869fe.pdf) 【英文学科】 新生オリエンテーション配布資料・動画、在学生ガイダンス用配布資料・動画	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>(https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023bun_freshman_guidance.pdf)</p> <p>【史学科】在学学生ガイダンス配付資料・動画 https://www.youtube.com/watch?v=7LivGZoJaac</p> <p>【地理学科】地理学科サイト・カリキュラム (https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/?page_id=979)</p> <p>【心理学科】新入生ガイダンス配付資料 (https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023bun_freshman_guidance.pdf)</p> <p>在学学生ガイダンス配付資料 (https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023_bun_zaigakusei_guidance.pdf)</p> <p>ピアサポート制度を活用して履修講習会を実施。</p>	
<p>1.4③</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『文学部履修の手引き』 ・2022年度 第1、5、6、10回 文学部定例教授会 議事録 ・2022年度 第1回 文学部定例教授会 資料23 ・2022年度 第6回 文学部定例教授会 資料6 ・2022年度 第10回 教学改革委員会 議事録 	
<p>1.4④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『文学部履修の手引き』 ・web シラバス・文学部 	
<p>1.4⑤</p> <ul style="list-style-type: none"> ・web シラバス・文学部 【哲学科】在学学生ガイダンス配布資料 (https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023_bun_zaigakusei_guidance.pdf) 【日本文学科】コースガイダンス配付資料 【英文学科】在学学生ガイダンス配布資料・動画 (https://hosei-keiji.jp/wp-content/uploads/2023_bun_zaigakusei_guidance.pdf) 【地理学科】新入生オリエンテーション配布資料・スライド、在学学生ガイダンス配布資料 【心理学科】在学学生ガイダンス用配布資料 	
<p>1.4⑥</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2022年度 第2回 文学部定例教授会 資料16 ・2022年度 第8回 文学部定例教授会 資料16 ・2022年度教員による授業相互参観実施状況報告書(2022年度第10回教学改革委員会資料) 	

1.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

1.5①「法政大学学則」別表(10)「認定単位の上限」に基づき、既修得単位などの適切な認定を行っていますか。	はい
--	----

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

1.5②「法政大学学則」第17条（卒業所要単位）に基づき、卒業の要件を明確にし、刊行物、ホームページ等のいずれの方法によっても、予め学生に明示していますか。	はい
1.5③成績評価の客観性、厳格性、公正性、公平性を担保するための措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
<p>1.5①</p> <ul style="list-style-type: none"> 『文学部履修の手引き』 【哲学科】「卒論手続きについて」（卒業論文指導に関する資料）【日本文学科】学科会議資料、「大学での国語力」、「ゼミナール入門」検討会・反省会資料 【英文学科】「英文学科の卒業論文について（シラバス）」（卒業論文ガイダンス配布資料） 【史学科】「史学科卒業論文の提出と評価について」、「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配付資料） 【地理学科】「卒業論文について」 【心理学科】心理学科 Web サイト「法政心理ネット」に、卒業論文の指導と評価について詳述(https://www.hosei-shinri.jp/guidance)。評価の基準として「文学部心理学科卒業論文評価表」などを掲載 (https://drive.google.com/file/d/1rXWtOX9SvYctVJw5ratMUugX_oeGGC-/view)。 <p>1.5②</p> <ul style="list-style-type: none"> 法政大学 HP「卒業要件」、「卒業所要単位」(https://www.hosei.ac.jp/hosei/disclosure/acquire/sotsugyo_yohken/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54) web シラバス・文学部 <p>1.5③</p> <ul style="list-style-type: none"> 『文学部履修の手引き』 2022年度 第1回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第4回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第5回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第6回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第7回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第8回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第10回 文学部定例教授会 議事録 2022年度 第11回 文学部定例教授会 議事録 	

1.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

1.6①授与する学位ごとに、アセスメント・ポリシーを記入してください。
<p>文学部は、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記のとおり検証を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 入学段階において、各種入学試験における成績、調査書等の記載内容等を用いて、アドミッション・ポリシーで求める能力・意欲が身につけているか、把握する。 2. 初年次における「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、文章読解・資料調査・レポート作成・ディベート等の基礎的なスキルや、主体的な学修態度を身につけたか、把握する。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

3. 各学科の専門科目、市ヶ谷リベラルアーツ科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目における試験やレポートの成果、アクティブ・ラーニングの取り組みや成果を通じて、専門分野の学問内容や研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握する。
4. ゼミナールにおける研究発表やレポートを通じて、自ら問題を発見して解決していく思考力・調査力、自らの考えを論理的に表現できる文章力・プレゼンテーション力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握する。
5. 卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握する。

上記 1～5 とあわせて、教養教育段階においては、学期末試験、実技試験などの客観テストを用いて、知識や外国語能力、情報リテラシー、スキルの学修成果を測定する。同時に、プレゼンテーション、ディスカッション、レポート執筆、実験、フィールドワーク、アクティブ・ラーニングを通して、自主性、論理的分析的思考力、課題発見力・解決力、表現力を測定する。

< 哲学科 >

哲学科は、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記のとおり検証を行う。

1. 入学段階において、各種入学試験における成績、調査書等の記載内容を用いて、アドミッション・ポリシーで求める大学での学修のための基礎的な学力・知識・思考力・表現力・意欲が身につけているか、把握する。
2. 初年次における「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、文章読解・資料調査・レポート作成・プレゼンテーション・ディスカッション等の基礎的なスキルや、主体的な学修態度を身につけたか、把握する。
3. 哲学科の専門科目、市ヶ谷リベラルアーツ科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目における試験やレポートの成果、アクティブ・ラーニングの取り組みや成果を通じて、哲学分野の学問内容や研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握する。
4. ゼミナールにおける研究発表やレポートを通じて、自ら問題を発見して解決していく思考力・調査力、自らの考えを論理的に表現できる文章力・プレゼンテーション力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握する。
5. 卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような、専門性を備えた知識や、深い教養と国際的視野、テキスト理解力、哲学的知見を現代の諸問題に応用する力、問題発見能力と独創的な発想力・問題解決能力を総合的に身につけたか、把握する。

< 日本文学科 >

日本文学科は、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記のとおり検証を行う。

1. 入学段階において、各種入学試験における成績、志願書等の記載内容、面接における応答内容等を用い、アドミッション・ポリシーに示すような能力・意欲を有しているか、把握する。

2. 初年次における「大学での国語力」、「ゼミナール入門」での取り組みや成果を通じて、基本的な文章読解力・文献探索力・論理的表現力を身につけたか、把握する。
3. 必修科目・必修選択科目における試験やレポートの成果を通じて、文学・言語・芸能に関する専門的な知識や研究方法、深い思考力や想像力、的確な日本語表現力を身につけたか、把握する。
4. ゼミナールにおける研究発表や文芸創作を通じて、問題発見力・問題解決力、プレゼンテーション力やディスカッション力、的確な日本語表現力を身につけたか、把握する。
5. 卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握する。

<英文学科>

英文学科は、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記のとおり把握を行う。

1. 入学段階において、出願書類を用いて、アドミッション・ポリシーが求める英語への関心、英語文学と英語圏文化への興味、外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲を持っているか、把握する。
2. 教養課程・専門教育課程の諸科目におけるレポートや試験の成果を通じて、論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力、自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力、幅広い知識や教養、英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の学問内容や研究方法、批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力を身につけたか、把握する。
3. 卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーが求める能力を総合的に身につけたか、把握する。

<史学科>

史学科は、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記のとおり検証を行う。

1. 入学段階において、各種入学試験における成績、調査書等の記載内容等を用いて、アドミッション・ポリシーで求める能力・意欲が身につけているか、把握する。
2. 初年次における「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、文章読解・資料調査・レポート作成・ディベート等の基礎的なスキルや、主体的な学修態度を身につけたか、把握する。
3. 学科の専門科目、市ヶ谷リベラルアーツ科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目における試験やレポートの成果、アクティブ・ラーニングの取り組みや成果を通じて、専門分野の学問内容や研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握する。
4. ゼミナールにおける研究発表やレポートを通じて、自ら問題を発見して解決していく思考力・判断力・調査力・分析力、自らの考えを論理的に表現できる文章力・プレゼンテーション力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握する。
5. 卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握する。

＜地理学科＞

地理学科は学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記の通り検証を行う。

1. 地理学科は入学段階において A 方式入試、T 日程方式入試、大学入試センター試験利用方式、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツに優れた者の特別推薦入試、自己推薦入試、外国人留学生入試、帰国生入試という各種の入学試験を実施し、成績、調査書等の記載内容を用いて、アドミッション・ポリシーで求める以下の能力・意欲が身につけているか把握する。
 - (ア) 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
 - (イ) 入学後の修学・研究に必要とされる基礎的な知識・教養を有している。
 - (ウ) 論理的な思考ができ、自分の考えを明確に表現することができる。
 - (エ) 地理学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。
2. 初年次における「基礎ゼミ」での取組や成果を通じて、文章読解・資料調査・レポート作成・ディベート等の基礎的スキルや、主体的な学修態度を身につけたか、把握する。また、初年次必修科目の「地理実習」では、資料の把握方法の修得、地図利用方法の修得、図化技術の修得、専門文献への取り組み方の修得等のスキルを身につけたか、また初年次必修科目の「地理学概論」では地理学的把握方法を身につけたか、それぞれ把握する。
3. 地理学科の専門科目、市ヶ谷リベラルアーツ科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目における試験やレポートの成果、アクティブ・ラーニングの取組や成果を通じて、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけ、そのことによって、地理学そのものの学問内容や研究方法を相対化し、研究方法や問題意識を身につけたか、把握する。
4. フィールドワークを行う「現地研究」においては、実施前の資料収集、計画立案、実施後の口頭発表やレポート等を通じて、調査方法、調査項目の整理方法を身につけ、ゼミナールでの発表や積極的な議論を通じて、各科目の専門知識・研究方法の修得、フィールドワークにおける体験等を、総合的に客観化し、自ら問題を発見できたか、そのための調査能力を身につけたか、それをプレゼンテーションで発表する能力を身につけ、さらには論理的に表現できるようになったか、等を把握する。
5. 上記 1～4 を実施していくことは必然的に卒業論文に結びつき、自然環境を把握する能力を養い、社会状況を把握することによる地域社会への理解を深めていく。卒業論文は地理学科で学んだ内容を総合化するものであり、卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握する。

＜心理学科＞

心理学科は、学生の学修成果について、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れ方針）、カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成・実施方針）、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）に照らして、下記のとおり検証を行う。

1. 入学段階において、各種入学試験における成績、出願書類の記載内容等を用いて、アドミッション・ポリシーに示すような能力・意欲が身につけているか、把握する。
2. 教養課程・専門教育課程の諸科目におけるレポートや試験、発表の成果を通じて、幅広い知識や教養、専門分野の学問内容や研究方法、自ら問題を発見し解決するための思考力や科学的・客観的な分析力、自らの考えを論理的に表

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>現するためのプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力を身につけたか、把握する。</p> <p>3. 卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握する。</p>	
1.6②上記のアセスメント・ポリシーは、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標となっていますか。	はい
1.6③授与する学位ごとに、アセスメント・ポリシーに基づき学生の学習成果を把握していますか。	はい
1.6④学習成果を可視化していますか。	はい
【根拠資料】	
<p>1.6①</p> <ul style="list-style-type: none"> 法政大学文学部 HP「アセスメント・ポリシー」 (https://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/assessment/) <p>1.6②③</p> <ul style="list-style-type: none"> 学習成果を把握（測定）する方法・文学部 (https://www.hosei.ac.jp/application/files/1715/8563/7329/04_.pdf) 『文学部履修の手引き』 web シラバス・文学部 <p>1.6④</p> <ul style="list-style-type: none"> 【哲学科】哲学科サイト (https://philos.ws.hosei.ac.jp/) 【日本文学科】『日本文学誌要』『法政文芸』 【英文学科】『SMILE』『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット） 【史学科】『法政史学』、地方史研究協議会「日本史関係卒業論文発表会」(http://chihoshi.jp/?p=2745) 【地理学科】『法政地理』、法政大学地理学会サイト (http://www.chiri.info/index.html) 日本地理教育学会サイト (http://www.geoedu.jp/) 【心理学科】心理学科 Web サイト「法政心理ネット」で、指導と評価の基準を詳述 (https://www.hosei-shinri.jp/guidance)。演習系科目においてプレゼンテーション能力を評価。『法政心理学会年報』に「修士論文・卒業論文要旨集」を掲載して学びの成果を公表し可視化。 	

1.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

1.7①授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	はい
1.7②大学評価室による学生調査結果（入学前アンケート・1年生アンケート・卒業生アンケート）を組織的に利用していますか。	はい
【根拠資料】	
<p>1.7①</p> <ul style="list-style-type: none"> web シラバス・文学部 2022年度 第1回 文学部定例教授会 資料 17 <p>1.7②</p> <ul style="list-style-type: none"> 2022年度 第8回 文学部定例教授会 資料 9-2 	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

(2) 特色・課題

以下の項目の中で、学部として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入をしてください。

【教育課程・教育内容】 【教育方法】 【学習成果】 それぞれの項目の中で「特色」または「課題」を選択し、内容について記入してください。

【教育課程・教育内容】

- ・教育目標、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの適切性と連関性の検証
- ・学生の能力育成のための、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容の適切な提供
- ・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系性への配慮（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等含む）への配慮が行われている。また教養教育と専門科目の適切な配置が行われている。）
- ・幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程の編成
- ・初年次教育・高大接続への配慮
- ・学生の国際性を涵養するための教育内容の提供
- ・学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育の適切な実施

特色

学生の国際性を涵養するための教育内容の提供

ILAC 科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目に指定している。また、英語強化プログラム（ERP）、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム（ESOP）のうちの英語開講科目、「短期語学研修」、「国際ボランティア」、「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている（英文学科では一部、選択必修科目に認定されている）。2020、2021、2022年度は COVID-19 禍の下で留学や SA の実施は制限され、実績は少なくなっているものの、オンラインプログラムの拡充などの対応を行い、制度を廃止せずにポストコロナに備えている。

なお、上記以外の各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

2011年度より「国際哲学特講」（秋学期2単位）を開講している。本科目では、アルザス欧州日本学研究所（CEEJA）の協力で、2月初めに海外研修を実施し、ハイデルベルク大学（ドイツ）、ストラスブール大学（フランス）と合同ゼミを行っている。また授業期間中にも、オンラインを活用して合同授業や個別の交流を活発に行っている。そのことを通じて、異文化への関心の喚起や自国文化の見直しを促し、学生の国際的な意識の涵養に取り組んでいる。

※2020、2021年度は COVID-19 禍のため、2月初めの現地研修は行わずオンライン研修で代替したが、2022年度は感染症対策に留意しながら欧州での現地研修を実施し、現地学生との合同演習を行った。

【日本文学科】

日本語・日本文学に関心をもつ留学生を積極的に受け入れるとともに中国文学に関する科目をゼミナール・選択必修科目・選択科目において開講し、日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。他にも海外の視点から日本を相対化して見つめなおす「日本文芸研究特講 15 国際日本学」や、日本語と外国語の比較研究が可能な「ゼミナール 22」を開講している。

【英文学科】

米国のフォントボン大学の秋学期 SA（長期）、アイルランドのユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの夏期 SA（短期）と秋学期 SA（長期）という3種のプログラムからなる学科独自の派遣留学制度（SA）を設け、短期 SA については1年次からの参加を積極的に勧めている。カナダのヴィクトリア大学の秋学期 SA（長期）の開始も2020年度に決定した。プログラム終了後には毎年 SA 報告会を開いている。さらに、新入生オリエンテーション、在学生ガイダンスで SA プログラムについて説明し、SA 説明会では『文学部英文学科 Study Abroad Program』パンフレットを学生に配付し

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

ている。また、留学先で修得した単位については、学科・学部の審議を経たうえで、SA 認定科目として認定している。

※2022 年度の各渡航 SA も COVID-19 の世界的な流行のため、中止となった。国際交流プログラムを継続的に行うための措置として 2022 年度にはヴィクトリア大学（カナダ・ブリティッシュコロンビア州）でのオンライン SA の実施に向けた準備を進めたが、応募者が最小催行人数に達しなかったため、実施は取り止めとなった。2023 年度には各渡航 SA を実施予定である。

【史学科】

外国史の科目では多様な地域を対象とするとともに、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習では中国語・英語の原書を読むことを義務づけている。さらに、中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。特に、国際性涵養の一環として復旦大学文物與博物館学系の協力のもと学生が主体的に学習プログラムを組み、相互に研究発表など意見交換の場をつくる取り組み（2019 年度は南京師範大学にて開催）を行っている。

※2022 年度の中国での研修は COVID-19 の世界的な流行のため、中止となった。

【地理学科】

外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講するとともに、世界の各地域に対応した「世界地誌」等を開講し、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。韓国・台湾・中国をフィールドとする「現地研究」を実施する年もあり、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。

【心理学科】

「演習 I」などの演習系科目や「心理学英語 I・II」を中心に各授業を通じて、心理学という学問の国際性を説明している。また、洋雑誌の講読を積極的に行うとともに、国際的な場での発表を可能にする語学力の養成に努めている。特に、専任教員が主導して大学院入試及び国際的な領域で活躍できることを視野に入れた自主英語勉強会を定期的に開催し、授業外でも英語力の強化に取り組んでいる。

【教育方法】

- ・教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）
- ・授業がシラバスに沿って行われているかの検証（後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）

特色	教育上の目的を達成するための、効果的な授業形態の導入（PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）
----	--

- ・文学部ではアクティブ・ラーニングを「講義内容に関連して、学生が書く、話す、発表するといった能動的活動を行い、気づき、発見、認知の変化などが確認できる、あらゆる学習活動である」ととらえ、「基礎ゼミ」、「ゼミナール」、「卒業論文」のみならず、各種授業においても、学生がこのような学習活動を実践できる仕組みを積極的に導入することを心がけている。
 - ・大教室における講義科目でも、リアクションペーパーや学習支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入し、アクティブ・ラーニングが実現できるように努めている。
- そのほか、各学科の特色ある取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・「基礎ゼミ」ではグループワークや討論を通じて学生間の意見交換を促進している。「基礎演習」、「哲学演習」ではアクティブ・ラーニング形式の授業を採用している。
- ・一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。

【日本文学科】

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ・「編集実務 A・B」で、学生は、DTP ソフトを使用して書籍や雑誌の誌面デザインを行ったり、小冊子の制作を行ったりしている。
- ・複数の「ゼミナール」で、学生は、直接、古典籍（写本や版本）に触れて研究を行っている。
- ・複数の「ゼミナール」で、学生は、論文や小説などを編集し、ゼミ誌を作成している。

【英文学科】

- ・「基礎ゼミ」、「2 年次演習」、そして「ゼミ」で学生に発表を課すのに加え、グループワークや相互フィードバックを通じて学生間の意見交換を促進している。
- ・「英語表現演習 (Speaking)」、「英語表現演習 (Writing)」において学生に英語で話したり書いたりする機会を継続的に提供している。

【史学科】

- ・「基礎ゼミ」、「演習」のほか、実習系科目群のなかで、PBL、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。

【地理学科】

- ・「基礎ゼミ」、「現地研究」、「演習」のほか、多くの科目が設置されている実習系科目群のなかで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。特に、1 年生の必修科目である「地理実習 (1)」、「同 (2)」では、積極的にアクティブ・ラーニングの内容を採り入れることで、早い段階から主体的な学びを修得できるカリキュラムを組んでいる。

【心理学科】

- ・「基礎ゼミ」、「演習」、「研究法」はもちろん、各授業において能動的に学びに向かうよう計画した教授・学習法を取り入れている。教育心理学におけるモチベーション向上のエビデンスをもとに、さまざまな心理教育を取り入れたグループワークを取り入れたり、検査・実験・調査など実践を交えた授業を展開している。リアクションペーパーやオンデマンド教材なども活用している。

【学習成果】

- ・成績評価及び単位認定を行うための制度や学位授与の実施手続き及び体制についての適切な運用。
- ・アセスメント・ポリシーに基づいた学習成果を把握する取り組み
- ・アセスメント・ポリシーに基づき学習成果を定期的に検証し、その結果をもとにした教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組み

特色	アセスメント・ポリシーに基づき学習成果を把握する取り組み
----	------------------------------

文学部および各学科の「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」にもとづき、以下のように学修成果の把握・評価を行っている。即ち、初年次教育では「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、大学での学修に必要なスキルと主体的な学習態度を身につけたか、把握している。専門科目・ILAC 科目等では期末試験、レポート、小テスト、リアクションペーパー等を通じて、専門分野の学問内容・研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握している。ゼミナールでは研究発表やレポートを通じて、課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力、プレゼンテーション能力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握している。卒業時には卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握している。なお、文学部では卒業論文が必修であるため、4 年間の学修成果は論文本体および口述試験によって、総括的に把握・評価が可能となっている。レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。

なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。

【地理学科】

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

教員免許、測量士補、地域調査士等の資格取得者数等の調査を毎年度実施している。

【心理学科】

「基礎ゼミ」、「心理学基礎実験」、「演習」、「研究法」などを通して、課題発見・解決力、思考力、調査力が向上するようカリキュラムが組まれている。各学生が向上できているかを把握できるよう各授業の目標や評価の仕方について適切にフィードバックしている。個々の学生が取り組む卒論研究については詳細なガイドラインを公開している (<https://docs.google.com/document/d/1TxPFB0VyEkYhBoUQy04VjyzCxzDA6w0Io9ue4Xpu02c/edit>)。実験・調査の実施においては、所定のルールに則った研究計画書を提出し、教員全員による倫理審査を受けることを義務付けている。学びの成果を客観的に公平に評価するために研究対象や研究方法に関する理解度や計画書の作成技術なども明確に定めている。

その他、上記項目以外で学部として「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。

特色

学習成果を可視化するために、各学科で以下のような取り組みを行っている。

【哲学科】

- ・一部の「哲学演習」における卒業論文反省会の実施（卒論面接審査後に4年生が他の4年生及び3年生に向けて自身の卒論内容と執筆上の反省点等を報告）、卒論論集・卒論要旨集の作成。
- ・一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配付資料、ゼミ活動をDVDに収録し、配付。
- ・「国際哲学特講」では毎年の研修成果を学科ホームページ上で公開。

【日本文学科】

- ・優秀卒業論文・卒業制作を学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』で公表。
- ・卒業論文の論題一覧を学術雑誌『日本文学誌要』に公表。
- ・「ゼミナールレポート集」、「卒業論文集」、「創作作品集」を作成し、「ゼミナール」における学修成果を公表。

【英文学科】

- ・年度末発行の学内誌『SMILE』に卒業論文論題一覧を公表、さらに各分野の優秀論文を掲載。
- ・学科生の団体 Links において、学生がゼミでの学習状況等を発表。
- ・学科 SA 報告会において海外留学の成果を発表。

【史学科】

- ・学科内学会の雑誌『法政史学』に卒業論文の題名一覧を公表。
- ・全国学会の主催する優秀卒業論文発表会への推薦（具体的には地方史研究協議会が主催する「日本史関係卒業論文発表会」）。

【地理学科】

- ・卒業論文面接試問（発表会）でのプレゼンテーションに加え、「卒業論文要旨集」（A4 各 2 ページ）を作成している。また、在学生も発表会に参加し、法政大学地理学会の定期刊行物『法政地理』に卒業論文の題目一覧を公表。
- ・全国地理学専攻学生卒業論文大会（日本地理教育学会主催）へのエントリー。
- ・『法政地理』への優秀卒業論文の投稿。

【心理学科】

- ・卒業論文の口頭発表会でのプレゼンテーションに加え、法政大学心理学会の定期刊行物である『法政心理学会年報』に「修士論文・卒業論文要旨集」を掲載して研究の成果を公表している。

課題

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

特になし。

2 学生の受け入れ

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

2.1①学部ごとに学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）を記入してください。

文学部は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、自己推薦入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 志望する学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

<哲学科>

哲学科は、文学部全体の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して以下に示すような能力・意欲を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 大学での学習のための一般的基礎学力を有している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な学力・知識を有している。また、論理的に思考ができ、自分の意見を表現することができる。
3. 哲学に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

<日本文学科>

日本文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。能力・資質を的確に判断して学生を受け入れるため、多様な入試経路を用意し、日本文学科で学ぶにふさわしい者に広く門戸を開放する。

※A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、自己推薦入試、社会人入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 日本の文学・言語・芸能について深い関心をもち、それらの研究や文芸創作に必要な知識・読解力・思考力・表現力全般にわたる、より多様でより奥深い人間的な学力・資質を有している。

<英文学科>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

英文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して、以下の点を重視し、一つの固定した視点にとらわれずに様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、国際バカロレア利用自己推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 英語への関心、英語文学と英語圏文化への興味をもっている。
5. 外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲を持っている。
6. 近年採用した国際バカロレア利用自己推薦入試では、とりわけ、一定の能力を持ちつつ多様な個性をそなえた受験生の入学を認めている。

<史学科>

史学科は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 史学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

<地理学科>

地理学科は、各種の入学試験（※）を通して、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、自己推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要とされる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 地理学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

<心理学科>

心理学科では、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 心理学科の専門分野に深い関心をもち、強い学習意欲がある。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

2.1②上記のアドミッション・ポリシーには、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを踏まえた、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像や、入学希望者に求める水準等の判定方法が明確に示されていますか。	はい
2.1③上記のアドミッション・ポリシーを公表していますか。	はい
【根拠資料】	
・法政大学文学部 HP「アドミッション・ポリシー」 (https://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/policy/admission/)	

2.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

2.2①アドミッション・ポリシーに基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入学者選抜をどのように公正に実施していますか。
特別入試では、複数の教員による書類審査、および面接を行っており、公正な入試の実施に努めている。さらに毎年、各学科にて様々な入試経路を経て入学した学生の成績を確認し、それぞれの入試の定員枠の見直しを行っている。また、併せて特別入試での出願資格の見直しも毎年行っている。

2.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

2.3①【2023年5月1日時点】学部・学科における入学定員充足率の5年平均又は収容定員充足率は、下記の表1の数値を満たしていますか。	はい
---	----

2.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

2.4①上記項目において【いいえ】と回答した場合は、その理由と改善に向けた今後の取り組みについて記入してください。

表 1

学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均	0.90～1.20 未満
学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率	0.90～1.20 未満

3 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

3.1①学部の求める教員像および教員組織の編成方針を記入してください。
学部・学科の理念を十分に理解した上で、学生一人一人に目の届くきめの細かい教育を行ない、かつ、独創的で最先端の研究に従事できる教員が求められる。同時に教員は、学部・学科運営にも積極的に関わることも重要である。 教員組織においては、年齢、性別、国籍、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究・指導が可能となる編制を目指す。
<哲学科>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

専門研究者としての実績、すぐれた教育指導力、そして高潔な人格を兼ね備えた人材が本学科の求める教員像である。また、本学科の教育課程は、西洋哲学を中心とした幅広い分野を網羅していることに大きな特色がある。この教育課程に即して、その主要部分を担当できる専任教員ならびにその他の部分を担当するに適した兼任講師をもって教員組織を編制する。

<日本文学科>

日本文学科はその目的を実現するため、日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての先鋭で多様な研究を可能にする、自立的な研究者・専門家からなる教員組織を編制する。教員にはその学風の礎となる研究活動への積極的な取り組みと、その研究成果を生かした教育活動への熱意ある取り組み、また教員組織を効果的に機能させる学科運営および学部・大学運営への主体的な関与が求められる。

<英文学科>

本学科の教員は、学科の理念・目的を実現するため、またさまざまな能力やバックグラウンドを持つ学生の教育指導に対応するため、さらには後の項目で述べる教育目標ならびにディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを踏まえて研究・教育に取り組めるよう、専門分野における高度な知識や研究能力、研究実績、教育技能を有することはもちろんのこと、学生の全人的な成長にも配慮できる人間性と高いコミュニケーション能力を持つことが求められる。

教員組織としては、社会や時代の変化によって変わっていく学生の教育・研究ニーズに対応できるように、幅広い専門がカバーできるような教員集団であることが望ましい。しかしながら、そうした現在の教育ニーズは必ずしも専任教員だけでカバーできるものではない。したがって、高い専門性を備えた専任教員の保持とともに、学内・学外での研究・教育者の人材確保のためのネットワークを有する教員組織をつねに目指している。

<史学科>

自らの専門領域で独創的で最先端の研究に従事するのみならず、個々の学生が学科の教育目標を達成できるよう自らの研究に基づき細やかな教育指導を行ない、さらに学科・学部運営や入試業務等の大学全体に関わる校務にも積極的に関わる教員が求められる。教員にはまた、地方自治体との連携や学会活動等を通じて、自らの研究成果を社会に還元する努力も求められよう。

教員組織としては、専任教員の半数を日本史分野、半数を外国史（東洋史・西洋史）分野とし、学科の教育目標の達成が可能となる編制を目指す。また、現状では年齢構成が偏っているが、徐々にバランスの取れた年齢構成になるようにしていく。

<地理学科>

確固たる信念と情熱を持って教育に取り組み、研究への飽くなき探究心を持ち続け、学生への規範となる高い人間性と指導力を持った人物が教員として求められる。その上で、学会活動や社会貢献にも積極的に取り組み、内外の教育研究者との連携を構築していることが望まれる。

教員組織においては総合科学としての幅広い地理学の領域をカバーすべく、人文、自然、それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織とするとともに、内外から優秀な人材を兼担、兼任講師として確保し、本学科の幅広い教育ニーズに対応可能な編制を行なう。

<心理学科>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

学部・学科の理念を十分に理解しながら、教育活動や研究活動をたゆまなく前進発展させていくことのできる教員が求められる。学部・学科運営にも自分の専門性に埋没することなく、バランス良く積極的に関わることも重要である。教員組織においては、年齢、専門分野を考慮しながら、学科全体としての理念を実現するのに十分な教育・研究が可能となるような各教員間の公平性・協調性が確保されるような編制を目指している。学科主任をはじめとした各種の役割は、輪番制をとりながら、特定の教員に偏ることがないように配慮し、教育・研究活動に必要な役割を全員が体系的に果たすようにしている。

3.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

3.2①学部の教員組織の編制は、理念・目的、教員組織の編制方針に整合していますか。	はい
3.2②教員組織の規模について、教育研究上必要となる数の専任教員がいますか。	はい
3.2③専任教員の専門性や、主要科目への配置など、教育を実施するうえでどのような体制をとっていますか。	<p>各学科とも専門分野等のバランスに留意し、カリキュラムに対応した専任教員の体制を組織している。また、必要に応じて兼任・兼任教員も配置し、より網羅的できめ細かな教育活動が行える体制を確立している。</p> <p>なお、各学科におけるカリキュラムと専任教員体制の対応は以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <p>幅広い哲学・思想分野をカバーするため、日本思想1名、古代ギリシャ哲学1名、英米系哲学1名、フランス系哲学・思想2名、ドイツ系哲学・思想4名、数理哲学1名、法哲学1名、比較文化1名の体制をとっている。</p> <p>【日本文学科】</p> <p>専任教員全16名のうち、文学コース11名、言語コース3名、文芸コース2名という配分となっている。学生の各コースへの所属を示すゼミナールの数では文学コース11、言語コース5、文芸コース5となり、カリキュラムの体系性にふさわしい教員組織である。</p> <p>【英文学科】</p> <p>専任教員13名のうち、専門科目を中心に担当する教員が9名、ILAC科目を中心に担当する教員が4名である。また分野的には、英米文学6名、英語学・言語学4名、英語教育学2名、ドイツ文学・比較文学1名という配分である。</p> <p>【史学科】</p> <p>日本史分野では、5名の専任教員（考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史）を配置している。東洋史分野では、従来からの2名の教員（文献史料・物質資料各1名）と2021年度採用の任期付教員1名（中国史）の計3名の専任教員を配置している。西洋史分野では、3名の専任教員（前近代史・近代史・現代史）を配置している。</p> <p>【地理学科】</p> <p>総合科学として幅が広い地理学の領域をカバーするべく、人文地理学・自然地理学それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織としている。実際に、退任した教員の専門分野を引き継ぐ形で、2022年度には人文地理学（農業地理学）の教員1名、2023年度には人文地理学（文化地理学）の教員1名が着任した。また、2022年度には自然地理学（地形学、堆積学）の助教1名も着任し、専任教員がカバーできる領域がさらに広がっている。多くの専門科目を他学部公開科目とすること、教員がILAC科目（市ヶ谷基礎科目・総合科目）を分担することで、他学部・他学科の学生と教員が接触する機会を多く設定し、教員の価値観・視野が狭窄なものとならないよう工夫している。</p>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

【心理学科】
 心理学科のカリキュラムは、「認知」と「発達」という心理学科独自の二領域を柱に据えながらも、心理学全体を網羅することのできる編成に特徴がある。現在、10名の教員で構成しているが、知覚、生理、発達、教育、学習、行動、犯罪、言語、スポーツ、健康といった各分野で活躍している専任教員で組織されている。

3.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

3.3①教員の募集、採用、昇任等の手続きや運用に関する規程は整備されていますか。	はい
3.3②上記の規定は、公正性、適切性が担保されるよう適切に運用されていますか。	はい

【根拠資料】

- ・「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」
- ・大学の定める「教員の定年に関する規程」、「法政大学名誉教授規程」、「市ヶ谷リベラルアーツセンター運営委員会規程」、「助教規程」、「学部任期付教員規程」等
- ・2022年度 第1回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第2回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第3回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第4回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第5回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第6回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第7回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第8回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第9回 文学部定例教授会 議事録
- ・2022年度 第10回 文学部定例教授会 資料8
- ・2022年度 第11回 文学部定例教授会 議事録

3.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

3.4①学部（学科）内のFD活動は組織的に行われていますか。	はい
3.4②上記項目について【はい】と回答した場合は、2022年度のFD活動の実績（開催日・テーマ・参加人数）を記入してください。	
<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度 第8回 文学部定例教授会 出席者59名 キャリアセンター（内田次長）による、「文学部生の就職活動状況とキャリアセンターの取り組み」についての講演（Zoomにて実施） 2022年12月21日16:00-16:30 ・2022年度 第10回 教学改革委員会 資料9 	
3.4③学部（学科）内において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	はい
3.4④上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績（開催日・テーマ・参加人数等）について記入してください。	
<ul style="list-style-type: none"> ・『法政大学文学部紀要』第85号（2022年9月） ・『法政大学文学部紀要』第86号（2023年3月） <p>【哲学科】例年5月に「法政哲学会」を実施（2022年度は例外的に11月2日開催、2023年度は5月27日に開催）。また、毎年度末に学会誌『法政哲学』を発行。</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>【日本文学科】法政大学国文学会大会（2022年9月24日開催）『日本文学誌要』第106号（2022年9月）『日本文学誌要』第107号（2023年3月）『法政文芸』第18号（2023年3月）</p> <p>【英文学科】法政大学英文学会（2022年10月29日開催）、『英文學誌』第65号（2023年3月24日発行）</p> <p>【史学科】法政大学史学会（2022年6月4日開催）『法政史学』第98号（2022年9月）『法政史学』第99号（2023年3月）</p> <p>【地理学科】法政大学地理学会総会（2022年5月14日開催）・第1回例会（2022年10月16日開催）・第2回例会（2022年12月17日開催）、『法政地理』第54号（2023年3月）</p> <p>【心理学科】第17回法政大学心理学会（2022年6月11日に開催）『法政心理学会年報』第17巻（2023年3月）。大学院特定課題研究所としてライフスキル教育研究所を設置しており社会貢献となる諸活動をおこなっており、これについても学会誌に記載している（https://www.hosei.ac.jp/kenkyu/kenkyusho/tokuteikadai/tokuteikadai_list/tokutei_lifeskill/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54）。</p>
--

4 学生支援

(1) 特色・課題

<p>以下の項目の中で、学部として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを選択し、記入をしてください。</p>	
<p>【学生支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生の能力に応じた補習教育、補充教育 ・学生の自主的な学習を促進するための支援 ・学習の継続に困難を抱える学生（留年者、退学希望者等）への対応 ・成績不振の学生の状況把握と指導 ・外国人留学生の修学支援 ・オンライン教育を行う場合における学生への配慮（相談対応、授業計画の視聴機会の確保等） 	
特色	成績不振の学生の状況把握と指導
<p>文学部では、成績不振の学生の状況把握と指導を以下のように行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成績不振学生の定義を明確化し、執行部が各学科主任へ成績不振学生の情報を提供し、対応方策の検討を教学改革委員会で行っている。 ・実際の成績不振学生への対応は、各学科主任の主導により、学科ごとに行っている。 ・まず、学科の教員が手分けをして当該学生との面談を行い、学科会議等で結果を報告する。次に、面談に応じなかった学生に対して学部事務課文学部担当から文書で連絡をする。ただし、精神的な問題を抱えている等の理由により、再三の呼び出しが本人のためにならないと学科において判断される場合には、個々の状況に応じた適切な接触の仕方を選択する。こうした三重の体制により、対応にあたっては万全を期している。 ・執行部および各学科では必要に応じて、学生相談室と連携をとりながら、成績不振学生への対応を行うこともある。 <p>そのほか、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「新入生オリエンテーション」、「在学生ガイダンス」において、成績不振の場合には保証人に通知のうえ面談を行う旨の説明をおこなっている。 <p>【史学科】</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ・1年生については、12月に判明する2年次以降の所属ゼミ希望調査用紙の未提出者について、履修状況・単位修得状況と成績を確認し、学科主任が本人や保証人に連絡して原因を調査し、相談に応じている。

【心理学科】

- ・新入生にはオリエンテーション時に少人数のグループに分け専任教員に割り振って、教員も含めて学生同士が交流できる機会を設けている。在校生についてはゼミ単位でガイダンス直後から全員に対応できるようにしているほか、気がかりな学生にはハガキやメールで連絡を取り、個々の状況に応じた対応を教員全体で共有して行っている。転編入など履修が複雑な学生にもこちらから個別に説明するなど、積極的に支援している。さらには、学部生主体の仲間を支援し合うピアサポート制度を心理学科設立時から組織化しており、ピアサポーター主催の歓迎会や履修講習会を開催し、大学生活での対人関係や学習における不適応を予防している。
- ・SSIコースの学生は履修の仕方に他の学生とは異なる点があることから、学科所属のSSI運営委員が早期に面談して丁寧に対応している。

その他、上記項目以外で学部として「特色」として挙げられるもの、または「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものがありましたら記入してください。

特色

学生の履修指導の取り組みとして、各学科専任教員は年度当初にオリエンテーション（1年次生対象）、在学生ガイダンス（2年次以降の学生対象）を実施している。また学務部学部事務課文学部担当は、4月に学部ガイダンス（1年次生対象）を実施している。

そのほか、各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・ラーニングサポーター制度を活用し、4月初めに主に新入生を対象とした新4年生による履修相談を実施している。
- ・各ゼミ（哲学演習）の初回授業においてゼミ紹介と卒業論文指導に関する説明を行っている。3年生以上の学生には、なるべく多くのゼミの初回授業に参加し、ゼミ選択の参考にしよう指導している。

【日本文学科】

- ・学科内留学生サポート小委員会による「留学生相談会」を開催している。
- ・新入生を対象とした懇談会として、例年4月に「新入生歓迎会」を開催し、同時にオフィスアワーの利用促進を図るため、そのまま新入生を連れて研究室訪問も実施している。
- ・春学期開講の「大学での国語力」において研究倫理の諸問題が取り扱われている。（2023年度「大学での国語力」シラバス）・1年次後半に「コース・ガイダンス」および「ゼミ説明会」を開催し、3コース制やゼミナールに関する説明を行っている。
- ・コースや研究分野に対応した5つの履修モデルを日本文学科公式サイトで公開している。
- ・4年次への進級や卒業履修要件の充足をめざし、履修状況の確認を学生各自で行う「3年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトで公開している。
- ・『卒業論文執筆のてびき』を配布し、卒業論文（卒業制作）の指導を行っている。

【英文学科】

- ・新入生の学習支援の一環として、4月初旬に「時間割相談会」を実施し、上級生に時間割作成上のアドバイスをもらう機会を設けている。
- ・例年4月に「新入生歓迎会」を実施している。
- ・例年5月に全専任教員が1年生全員を対象にしたグループ単位の「新入生面談」を行い、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を実施している。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<ul style="list-style-type: none"> ・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施している。 ・法政大学文学部英文学科の学部学生・教員、そして英文学科の卒業生をつなぐ Links という会を設立・運営し、教育、研究上の交流を深め、また Web サイト「法政大学英文 WEB」において、各種説明会や研究会の案内を行っている。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新入生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。 ・1年生には、11月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生を対象に5月～6月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新入生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、適宜学科会議で情報共有し、対応を検討している。 ・秋学期に行っている地理学科独自の卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続の方法や、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。 ・地理学科ウェブサイトにおいて『文学部履修の手引き』に書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格、最新の情報などについて説明している。 ・ラーニングサポーター制度を活用し、新入生を対象とした4年生（6名）による履修相談会を実施した（2023年4月4日開催、参加人数1年生59名）。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入生に対しては、学科主任をリーダーとして専任教員によるグループでの交流を行っており、オリエンテーション時から孤立化しないように努めている。困ったときの窓口もオリエンテーションやガイダンスで丁寧に説明している。 ・心理学科の学部生で構成されるピアサポート制度を学科設立時から導入しており、ピアサポーターによる履修講習会、ゼミ説明会などを通じて仲間による履修や学びの具体的なプロセスについて説明している。ピアサポーターと学科主任が協力し教員と学生間の関係性を緊密にしている。 ・学科のカリキュラムや特徴、教員の紹介、学びの場が常に提供できるように心理学科独自の Web サイト「法政心理ネット」を立ち上げており、わかりやすいガイドラインを提示している。重要な資料は PDF でダウンロードが可能なように設定している。
課題
特になし。

5 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

5.1①学部として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度 第10回 文学部定例教授会 資料24 <p>【哲学科】春学期開講の二つの「基礎ゼミⅠ」において「研究倫理」が主題化されており、同科目内で文献利用法に関する図書館研修も予定されている。（2023年度「基礎ゼミ」シラバス）</p>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

<p>【日本文学科】2023年度_日本文学科新入生オリエンテーション_動画 (https://youtu.be/Gv1g0Nj8m-g)</p> <p>【英文学科】新入生オリエンテーションおよび在学生ガイダンス資料「卒業論文・レポートを書くにあたって 剽窃 (plagiarism) について」</p> <p>【史学科】卒業論文ガイダンス配付資料・動画、基礎ゼミシラバス</p> <p>【地理学科】新入生オリエンテーション配布資料・スライド、在学生ガイダンス配布資料・スライド、基礎ゼミ I の授業、地理実習 (2) の授業。</p> <p>【心理学科】オリエンテーション・ガイダンス時に公正な研究活動についてスライドで作成し、学部の HP でスライド及び動画で配信している。また心理学科 Web サイト「法政心理ネット」にてガイドラインを示している (https://www.hosei-shinri.jp/guidance)。</p>

III 2022 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
中期目標	学位授与方針に基づき、各学科の専門分野の学問内容を積み上げてゆく専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目とを融合・連携させた、現行の教育課程・教育内容をさらに発展させる。また、全学共通の新規科目の取り込み方を含め、設置科目の見直しを引き続き行う。	
年度目標	専門科目と教養科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を進める。	
達成指標	各学科でカリキュラム改革案を策定し、必要に応じて教授会で学則改定のための手続きを行う。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	教学改革委員会 (1-7、2-8、3-7、4-7、5-8、6-10、7-1、8-11、9-4、10-8、ここで n-m は第 n 回委員会の議事番号 m の意) および教授会 (1-20、2-10、3-10、4-14、5-13、6-19、7-24、8-9、9-11、10-23、11-21、ここで n-m は第 n 回教授会の教学関係議事番号 m の意) において議論を重ねつつ、第 5 回教授会にて学部案をまとめたあと、ILAC 運営委員会における協議も続けている。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	教授会および教学改革委員会において議論を重ね、学部案をまとめて ILAC 運営委員会に提案して協議を開始したことで、年度目標は十分に達成している。
	改善のための提言	—
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
中期目標	教育課程の編成・実施方針に掲げた課題の発見・解決やそれを表現する能力の涵養に資する教育方法を、各年次における演習科目等で継続するとともに、他の科目でも適用範囲をさらに広げてゆく。	
年度目標	対面・遠隔の同時混合 (ハイフレックス) 型授業において遠隔参加者にも双方向性を持った教育方法をとるための取り組みに関し、その有効性を検証する。	
達成指標	各学科会議で具体例とその効果をまとめ、それらについて教学改革委員会にて情報交換する。	
	教授会執行部による点検・評価	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

年度末報告	自己評価	A
	理由	第2回文学部質保証委員会における議論をもとに、第10回教学改革委員会でも情報交換した。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	各学科が今年度の授業における取り組みや生じている問題点、さらに次年度に向けた計画等を報告し、情報交換の機会が得られたことは評価できる。
	改善のための提言	—
評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	演習以外の科目においても、双方向型の運営部分をさらに充実することにより、学生の学習成果についてより精緻に把握する。学期中の各段階における学習成果の測定をより細かく行い、それを学生へ適切に伝えられるようにする。	
年度目標	学生が提出する課題回答に対して教員が十分に対応できているか、学生アンケート等を参考にしつつ検証する。	
達成指標	各学科会議で聴取した意見を教学改革委員会で取りまとめ、教授会に報告する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	B
	理由	各学科のFDミーティングにおいては、課題へのフィードバックの方法などの意見交換は行われているが、学部全体での情報の集約は行われなかった。
	改善策	特に課題回答に対する対応が適切に行われているか否かに焦点を絞って、学部全体でも情報集約する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	各学科においてFDミーティングが行われ、意見交換が進んでいることは評価できる。
改善のための提言	情報システム（desknet's等）を活用して一定期間内に学科から情報を提出し共有する仕組みを作成するなど工夫すべきであろう。	
評価基準		学生の受け入れ
中期目標	学生の受け入れ方針として設定した能力・意欲等を入学した学生が有していたと言えるか否か、各種の入学試験経路別に分析を続けることにより、それぞれの試験のあり方を再検討してゆく。	
年度目標	指定校推薦入試の人数枠について、近年行われた変更の有効性を検証する。また、外国人留学生入試における二つの異なる型について、応募資格の比較検討を続ける。	
達成指標	指定校推薦入試や外国人留学生入試を含む各種入学試験の実施方法案について、応募者数の推移や入学後の成績を参考としながら入試小委員会において検討する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	第1、4、5回文学部入試小委員会において検討した。
	改善策	—
質保証委員会による点検・評価		

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

	所見	文学部入試小委員会が各種入学試験の実施方法について検討を続けており、検証が正しく行われていることを確認した。
	改善のための提言	指定校推薦入試や外国人留学生入試による入学者の成績分布を各学科で評価して、さらなる改善を続けていくべきであろう。
評価基準		教員・教員組織
中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。	
年度目標	専任教員の新規採用に際しては、将来に予想される教員構成を勘案しつつ、適切に人選する。	
達成指標	人事委員会および教授会において、教員構成の現状分析と将来構想を加味しながら、専任教員の新規採用に関する審議を行う。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	専任教員の新規採用に関する審議が行われた人事委員会および教授会（それぞれ第1、3、4、5、6、7、8、11回）において審議を行った。
	改善策	－
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	人事委員会および教授会においては年齢構成や分野等を加味した審議が行われており、適切な採用が行われていることを確認した。
	改善のための提言	－
評価基準		学生支援
中期目標	①成績不振学生への個別指導を丁寧に行う。また、外国人留学生、体育会学生等への特性に応じた支援も行う。	
年度目標	①成績不振学生に対し、個々の事情に合わせた対応がとれるようにする。渡日できない留学生のための授業形態を整え、体育会学生への情報提供も行う。	
達成指標	①成績が繰り返し不振となる学生に関し、過去の面談結果を十分に考慮した個別指導のあり方を教授会において検討する。年度初めの体育会学生向けガイダンス等も続ける。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	繰り返し成績不振となった学生に対する個別指導の適正化を目的とする、面談に関する2023年度からの新たな方針を、第7回教授会において審議承認した。
	改善策	－
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	成績不振学生への対応が今年度の取り組みによって適切に整えられたことを確認した。体育会学生に対するガイダンスも継続的に実施されており、目標は十分達成されている。
	改善のための提言	－
評価基準		学生支援
中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。	
年度目標	②キャリア支援に繋がる授業科目のさらなる充実を図る。	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

達成指標	② 共通科目運営委員会において、学部共通科目「文学部生のキャリア形成」の次年度外部講師に関し、海外を含む遠隔地在住者への依頼も検討する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	第4回共通科目運営委員会において、2023年度の外部講師の一部として、海外在住者への依頼を決定した。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	学部共通科目において海外で活動する卒業生を外部講師として依頼することは、学生の進路に対する視野を広げるためにも良好な取り組みとして高く評価できる。
	改善のための提言	—
評価基準	社会連携・社会貢献	
中期目標	学部の教育・研究を社会へ広報することで学部の社会における認知度を高めつつ、社会人の学び直し等の機会提供に努める。	
年度目標	学部創設百周年に合わせ、学部におけるこれまでの教育・研究活動について社会に向け広報に努める。	
達成指標	百周年記念事業として、公開企画を行うとともに、記念誌を発行する。	
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	2022年10月15日、BTスカイホールにて百周年記念式典を開催し、インターネット配信も行った。2023年発行予定の記念誌についても原稿をまとめている。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	文学部創設百周年記念事業は、文学部の社会的な認知度を高めるよい機会となった。
	改善のための提言	—
<p>【重点目標】 専門科目と教養科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を進める。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2021年度に各学科で議論を開始したカリキュラム改革案について、未確定部分の検討を進めるとともに、ILAC等との調整を行う。秋学期にはカリキュラム改革に伴って必要となる学則改定を学部長会議にて提案する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 重点目標として掲げたカリキュラム改革に関して、各学科で検討しつつ毎月の教学改革委員会および教授会において議論し、学部案をまとめた。新たに必要となる成績管理システムの構築等に関する法人との折衝を経て、新カリキュラムの実施時期を当初予定の2023年度から2024年度に1年間先送りすることとなったため、学則改正は2023年度に行うことに変更したが、新規事業の予算措置については既に法人において承認を得た。また、ILACとの調整は引き続き行っている。</p>		

IV 2023年度中期目標・年度目標

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	学位授与方針に基づき、各学科の専門分野の学問内容を積み上げてゆく専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目とを融合・連携させた、現行の教育課程・教育内容をさらに発展させる。また、全学共通の新規科目の取り込み方を含め、設置科目の見直しを引き続き行う。
年度目標	教養科目と専門科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を実現する。
達成指標	各学科においてまとめたカリキュラム改革案にもとづいて学内の調整を進め、教授会で学則改正のための手続を行う。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	教育課程の編成・実施方針に掲げた課題の発見・解決やそれを表現する能力の涵養に資する教育方法を、各年次における演習科目等で継続するとともに、他の科目でも適用範囲をさらに広げてゆく。
年度目標	カリキュラム改革による変更点を見通しつつ、卒業論文につながるよう設計した授業の配置が適切になされているかどうか検証する。
達成指標	各学科会議においてカリキュラムマップやカリキュラムツリーの適切性について議論し、見直すべき内容があれば修正する。
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	演習以外の科目においても、双方向型の運営部分をさらに充実することにより、学生の学習成果についてより精緻に把握する。学期中の各段階における学習成果の測定をより細かく行い、それを学生へ適切に伝えられるようにする。
年度目標	学生が提出する課題回答に対して教員が十分に対応できているかアンケート等を参考にしつつ引き続き検証する。
達成指標	各学科会議で聴取した意見をとりまとめ、教授会に報告する。
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	学生の受け入れ方針として設定した能力・意欲等を入学した学生が有していたと言えるか否か、各種の入学試験経路別に分析を続けることにより、それぞれの試験のあり方を再検討してゆく。
年度目標	外国人留学生入試の制度について、さらに望ましい方法を検討する。
達成指標	留学生入試制度の改善案を各学科・入試小委員会で審議し、必要に応じて教授会において制度の変更を行う。
評価基準	教員・教員組織
中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
年度目標	年齢、国際性等の観点から教員組織の現状を検証し、専任教員を適切に採用する。
達成指標	人事委員会および教授会において、教員構成の現状と学部学科の将来構想をふまえて、専任教員の新規採用に関する検討を行う。
評価基準	学生支援
中期目標	①成績不振学生への個別指導を丁寧に行う。また、外国人留学生、体育会学生等への特性に応じた支援も行う。
年度目標	①成績不振学生の定義と指導方法を見直し、より適切な指導がとれるようにする。体育会学生への支援につながる情報提供も行う。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

達成指標	①成績不振学生の定義を再整理して教授会で審議・確定した上で、学科毎に個別の学生指導を行って教授会に報告する。年度初めの体育会学生向けガイダンス等も実施する。
評価基準	学生支援
中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。
年度目標	②キャリア支援に繋がる授業科目のさらなる充実を図る。
達成指標	②学部共通科目「現代のコモンセンス」において海外で活躍する方による講演を実現し、共通科目運営委員会においてその効果について検討する。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	学部の教育・研究を社会へ広報することで学部の社会における認知度を高めつつ、社会人の学び直し等の機会提供に努める。
年度目標	学部専任教員の教育・研究・受賞・出版等の成果を積極的に広報し、学部の社会における認知度を高める。
達成指標	学部専任教員による、社会貢献につながる諸活動・諸成果を大学ホームページや文学部ホームページに掲載する。
<p>【重点目標】 専門科目と教養科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を実現する。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2021年度以来各学科および学部教授会で検討を続けてきた学部カリキュラム改革案について、ILACや他学部との調整を行い、教授会において改革内容を決定する。秋学期には学則改定を学部長会議において提案する。</p>	

【大学評価総評】

文学部では、2022年度の大学評価委員会の評価結果への対応状況として、2023年度は、授業方法の議論、外国人留学生入試の改善、国際性を涵養するプログラムの再開、成績不振学生への対応等を挙げている。そして特色として学生の国際性の涵養、学習成果の可視化、成績不振学生のサポートを掲げ、積極的に取り組んでいることが、高く評価できる。

教育課程・教育内容の特色として学生の国際性を涵養するための教育内容の提供を掲げており、哲学科の「国際哲学特講」で、2023年2月に欧州での現地研修を実施(2020、2021年度はオンライン)した点が評価できる。今年度以降、スタディ・アブロード(SA)プログラムの復活に期待する。

学習成果の特色としてアセスメント・ポリシーに基づき学習成果を把握する取り組みを掲げている。学科ごとでは、地理学科では、資格(教員免許、測量士補、地域調査士等)取得者数等の調査を毎年度実施し、学習成果を把握しているが、これらの資格の取得をアピールすることで入学希望者の獲得につなげている点は大いに評価できる。多くの学科では優秀卒業論文・卒業制作の公表を通じて学習成果の可視化に取り組んでいる点が評価できる。文学部は6学科あるが分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標を設定している。今後は把握した結果をもとにした教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みが望まれる。

学生支援の特色として成績不振学生の状況把握と指導が掲げられている。成績不振学生に対しては、個々に面談を実施することを原則とし、状況に応じて丁寧かつ慎重に対応している点が評価できる。成績不振学生以外にも、英文学科、史学科、地理学科では入学時の新入生面談、哲学科と地理学科では新入生を対象とした新4年生による履修相談会(ラーニングサポーター制度を活用)、英文学科では時間割相談会を実施するなど、学生に寄り添った対応をしている。学科によってはラーニングサポーター制度の

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

恩恵を受けた学生が、次年度以降に学習系のサークル内で履修相談を行うようになるなど、課外活動における自主的な取り組みにつながった例もみられ興味深い。

2022年度の目標は重点目標を含めて概ね達成されている。達成されていなかった場合もその理由が記載されており、2023年度の目標として引き続き設定されている。

今後、COVID-19 禍から通常に戻る中で、禍中に得た経験も活かして、さらに高い水準の教育、研究が行われることを期待する。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023年度自己点検・評価シートに記載された Ⅱ自己点検・評価（1）点検・評価項目における現状を確認	法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた
<法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目>	

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。